

ただ、君を愛してる

2006(平成18)年7月26日鑑賞(東映試写室)

★★★★



監督=新城毅彦/原作=市川拓司/主題歌=大塚愛『恋愛写真』/出演=玉木宏/宮崎あおい/黒木メイサ/小出恵介/上原美佐/青木崇高/大西麻恵 (東映配給/2006年日本映画/116分)

……『いま、会いにゆきます』(04年)に続く純愛モノだが、主人公はどこにでもいそうな今ドキの大学生。しかし、実は2人とも変な(?)コンプレックスを持っていた……。若手実力派女優、宮崎あおいの1人2役「的」な演技が見モノ。前半では肉体的に未成熟な女子学生が、後半からクライマックスに向けて見せる美しく女らしく成長した魅力は、その差が大きいだけに余計に目立つもの。「彼女はよくウソをつく」というナレーションから始まる物語だけに、ウソがポイント……。そして、ウソには涙を誘うウソや、ずっとつき続けてほしいウソもあることが、この映画を観ればよくわかるはず……。

キャンパス内の人間関係は……？

この映画の登場人物は、すべて東京の某大学に入学した大学生ばかり。誰でも大学に入学した時の最初のテーマは、どんな友人をつくり、サークルを含めどんなグループに属するかということ。そういう観点から観ると、富山みゆき(黒木メイサ)を中心としたグループが、関口恭平(小出恵介)、井上早樹(上原美佐)、白浜亮(青木崇高)、矢口由香(大西麻恵)。そしてこのグループ内では、ある男とある女がそれぞれカップルになりそうな予感が……。

他方、こんな仲間の中に溶け込まない「変わりモノ」が、瀬川誠人(玉木宏)と里中静流(宮崎あおい)。誠人がそうになっている理由は、本人の悩みはともかく客観的に見ればちょっとマンガチックなものだが、静流がそうになっている理由は実は深刻なもの……？ それはともかく、食堂の中でいつも1人で食事をして

いる誠人に、最初に声をかけたのがみゆき。誠人はそのきっかけによって素直にそのグループの中に入ったが、静流はやはり別行動……。静流はひよんなきっかけで入学式の日には声をかけられた誠人にしか心を開かなかったが……。

「彼女はよくウソをつく」は誉め言葉……

映画の冒頭に登場する、ニューヨークに到着した誠人のモノローグは、「彼女はよくウソをつく」というもの。それだけ聞けば、彼女（静流）に対する恨みつらみの表明か、と思ってしまうが、実はそうではなく、これは誉め言葉。さて、そのココロは……？ それがこの映画の大きなテーマ。誠人はあるコンプレックスから他人とは一定の距離を置いた生活をしており、趣味のカメラがそんな生き方を助長しているが、基本的にはごく普通の今ドキの大学生。したがって、入学式の日、横断歩道をなかなか渡れないで困っている（？）静流に、「ここでは渡れないから、あちらの横断歩道に行った方がいいよ」と声をかけた行動はごく自然なもの。しかし、これを聞いた静流の対応はかなり変わったもの……。そして、なぜか（誠人にホレたから……？）誠人に対してのみ心を開いた静流が、その後いろいろな「言葉の変化球」を投げてくる様子が面白い。現在大学生の「幼稚」化が心配されているが、そもそも男より女の方が精神的には早熟だから、今ドキは大学生でも女性の方がいろいろな面でリードしている感が強いはず。この2人の「対話」を聞いているとその傾向が顕著で、誠人はいつも静流に振り回されている感じ。したがって、そんな静流のウソに誠人がコロリと騙されるのは当然……？

ひどすぎる授業風景に警鐘を！

大学生を主人公にした映画だから、当然授業風景が何回も登場するが、これが全くいけない。誠人や静流、みゆきが受けている授業は、ロシアの政治は云々……という難しそうな内容だが、誠人は真面目に授業を聴いているものの、みゆきはおしゃべり、静流は居眠りという有り様。それが2回目、3回目、4回目になると、みゆきはウエディング雑誌ばかり読んでいるし、静流は居眠り三昧。さらに授業を聴いている学生の数も明らかに減っているうえ、その大半が堂々と居眠り。ところが、先生は全くこれを怒る気配なし……。どこの二流、三流大学

か知らないが、こんなひどすぎる授業風景には警鐘が必要。もっとも、これは一流大学でも同じ……？ いやそんなことはないはず。私が講義している愛媛大学や関西学院大学法科大学院ではこんなではなかった。私なら、学生がこのような態度を示せばたちまち教室の外へ追放するか、授業自体をやめてしまうはず。ちなみに、数年前の某大学の講義では、1度そういう「前科」もあるところ……。

こんな同棲生活(?) ってホントにあり……？

誠人がどんな家庭の出なのか映画の中では全くわからないが、彼が住んでいるのは、「都心のマンションより家賃が安い」と言っているもののがかなり立派な一戸建てで、写真を現像する暗室まである。他方、静流は「ある事情」から、それまで住んでいた親元を飛び出したため、大学の中の空いている部屋に仮住まいさせてもらおうとしていたところ、それなら「俺の家に住めばいいじゃないか」と誠人が助け船(?)を出したから大変……？ 手持ちのわずかな荷物を持って引っ越してきた初日の2人の様子は、まるで新婚夫婦のよう……。そのうえ、風呂上がりでパジャマ姿の静流に、「さあ寝ようか」と誠人が声をかけたものだから大変……？ 誠人が好きな女性は、あくまでみゆき。したがって、静流は恋愛のターゲットにならないばかりか、そもそも女と思えないらしい……。ところがそんな静流は健気なもの(?)で、「好きな人が好きな人を、好きになろう」と努力した結果、静流はみゆきとお友達になることに成功……。こんな同棲生活(?)を続け、毎晩ひとつ屋根の下で寝ていても、誠人の静流に対するそんな気持には何の変化もないらしい……。しかし、こんな同棲生活ってホントにあり……？ そりゃおかしいのでは……？ 誠人がホントに好きなのは実は……？

やはり出色！ 宮崎あおいの演技力

宮崎あおいが最近出演した映画は、私が観た『好きだ、』(05年)と『初恋』(06年)の他にも『銀色の髪のアギト』(声優)、『ギミー・ヘブン』『エリ・エリ・レマ・サバクタニ』の3本があるうえ、NHKの朝ドラ『純情きらり』のヒロインとして毎朝国民にその姿を見せているのだから、その活躍ぶりは驚異的。

『好きだ、』も『初恋』も彼女の特徴を最大限に活かした(?)すばらしい作品

だったが、本作で彼女が演ずる静流のキャラはかなり異質であるうえ、「1人2役」的な演技が要求されるという難しいもの。映画前半の、女性として未成熟な大学生静流だけを観ていると、それほど魅力的とは思えないが、メガネを外してのはじめてのキスシーンからラストに向けて登場する成熟した静流を見ると、ストーリーは一気に盛り上がってくるうえ、前半の静流までも魅力的に思えてくるから不思議なもの……。やはり、これはすべて宮崎あおいの出色の演技力の賜物……。

やはり微妙！ 黒木メイサの立場

他方、黒木メイサは『同じ月を見ている』（05年）と『着信アリ Final』（06年）に出演した沖縄生まれのまだ20歳にもならない「超」美人女優だが、『着信アリ Final』でも同じ美人女優ながらタイプの違う堀北真希がストーリーの上では前面に出ていたし、『同じ月を見ている』でも、私が「この映画での彼女の存在感は、今ひとつ……」と書いた（『シネマルーム9』179頁参照）ように、その美人ぶりが十分に活かされていない中途半端な役柄だった。そして、『ただ、君を愛してる』でもそれは同じ。美人のみゆきはキャンパスの中では「1番人気」だし、誠人から一目惚れされているにもかかわらず、またこの2人は花嫁・花婿姿で写真撮影までしているにもかかわらず、結局誠人の気持が静流に向いてしまうという、いわば「負け犬」の立場になってしまった。さらに、ラストで展開される物語の中では、彼女はあくまで「いいお友達」としての役割を今後も担うことに……。それがどんな役割なのかは映画を観てのお楽しみだが、やはり黒木メイサの立場は微妙。こんな中途半端な役柄に甘んじることなく、彼女には近い将来主役を張ってもらいたいものだが……。

アッと驚くドンデン返しに注目！

この映画の前半は、精神的には一人前（？）だが、肉体的には（女性としては？）一人前になりきれていない静流の少しエキセントリックな言動が興味的で、そんな役柄を宮崎あおいが熱演（？）している。誠人を中心とした2つの恋愛模様の展開は、学園モノ恋愛ドラマとしてよくあるパターンだが、実はこの映画ではその中に伏線がいくつも用意されている。そして、ニューヨークで開かれ

る静流の写真展の物語に突入すると、最後のアッと驚くドンデン返しに向けて一気に緊張感が高まる中、クライマックスへ……。そしてそこでは、大学時代のメガネをかけた肉体的にも貧弱で目立たない女の子であった静流が、女性として美しくかつセクシーに成長した姿を私たちの目の前に見せてくれる。そのあまりの差に唾然とするのは、私だけではないはず……。そのアッと驚くドンデン返しに注目を！

フラッシュバックの多用は逆効果……？

私は今日7月26日に映画検定4級の合格通知を受け取ったが、6月25日の検定日に向けて「フラッシュバック」についても、「進行しているストーリーの時間的な連続性を破って、過去に起きたことを提示する手法。フラッシュという言葉からもわかるように瞬間的な映像を指す」と、きちんと勉強した。

この映画は、冒頭のニューヨークのシーンから一転して6年前の大学入学時に物語がさかのぼり、最後にまたニューヨークでの現実の物語に戻っていくという構成になっているが、この最後の物語の中で多用されるのが「フラッシュバック」。つまり、誠人があの時の静流の姿や静流との会話を思い出すための映画特有のテクニック。しかし、あまりこれを多用すると、彼が今思い出しているのはあの時のあのシーンという形で露骨に説明されることになるため、逆に彼はきっとこんなことを思い出しているに違いない、と観客が想像することが少なくなり、情緒や余韻に欠けることになってしまう危険が……。そういう観点からすると、私にはちょっとフラッシュバックの多様さが目につき、かえって逆効果だと思ったが……。

『いま、会いにゆきます』VS『ただ、君を愛してる』どちらがスキ……？

この映画は、純愛モノ映画として大ヒットした『いま、会いにゆきます』（04年）の原作者である市川拓司の小説『恋愛写真 もうひとつの物語』を映画化したもの。そしてそのタイトルは、大塚愛が歌う『恋愛写真』のサビの部分「ただ、君を愛してる」というフレーズをそのままとったもの。この小説や曲のタイトルからわかるとおり、この映画も『いま、会いにゆきます』に続く純愛モノだが、その切り口は全く異質。さて、あなたはどちらが好き……？

2006(平成18)年7月27日記